五日市高校の生徒に読んでほしい本

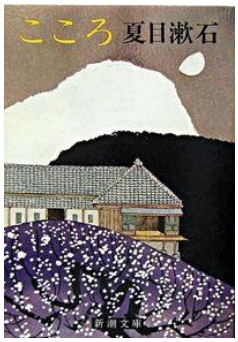
ITSUYOMU

令和５年度・夏
五日市高等学校
図書館

ミンミンゼミが鳴き始めると、いよいよ夏休みがやってきます。学校図書館では推薦図書を 14 冊展示中です。その中から夏を感じる 10 冊を紹介します。是非手に取って読んでみて下さい。

【　推薦者・図書館専門員Ｋ　自己紹介　】

夏は秋川・桂川にアユ釣りに出かける毎日を過ごしています。夏という季節が書かれた、印象的な作品を推薦してみました。



『こころ』

夏目漱石 著
新潮社／2004 年
B913.6 ナ

高校生の頃、国語の教科書に掲載されていた内容が面白そうだったので、図書館で借りて読み、漱石の沼に引きずり込まれた作品です。再読してみて、私と先生との出会いが夏の海水浴場であったなんて、すっかり忘れていました。「私は生きる価値のない人間です」という先生の言葉にドキドキしながら、当時読んでいたのを、思い出しました。

『汝、星のごとく』

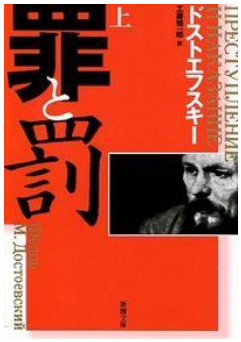
凪良ゆう　著
新潮社／2022 年
Ｂ913.6　ナ

瀬戸内の島に育った高校生の暁海と、自由奔放な母の恋愛に振り回され島に転校してきた櫂との恋愛物語です。「誰に何を言われようと、したいと思ったことを実行する」夏の花火大会での２人の会話が印象的です。登場人物全てのキャラが異様で、ひき込まれていきます。

『星に願いを、そして手を。』

青羽悠　著
集英社／2017 年
913.6 ア

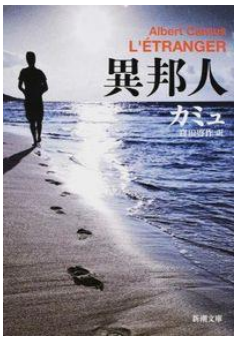
16 歳で小説すばる新人賞を受賞したと知り、興味が湧き読んだ作品です。プラネタリウムで夏の星を見るのが好きな４人の幼馴染がいました。４人は同じ高校に進みます。しかし僕と理奈が別れたことで、お互いが疎遠になります。卒業後、科学館の館長の死をきっかけに会うことになり、物語は再び動き始めます。



『罪と罰』

ドストエフスキー　著
工藤清一郎　訳
新潮社／2008 年
B983 ト 1-2

高校生の頃、先生に「なんか面白い本ないですか」と質問したとき勧められた本です。何度読んでも新しい発見がある本です。冒頭の「七月はじめの酷暑のころのある日の夕暮れ近く、一人の青年が・・」で始まる出だしは、主人公のむしゃくしゃした感情を夏の暑さで表現していてとても好きなシーンです。



『異邦人』

カミュ　著
窪田啓作　訳
新潮社／1995 年
B953 カ

高校生の頃、「英語が上達したかったら夏休み英語のみで書かれた小説を読みなさい」と言われ、苦労して読んだ作品です。母が死んだ日に海水浴に行き「太陽が暑かったから人を殺した」と判事に語るムルソーの心理は衝動的で、ハチャメチャで、理解できなくてとても怖いのですが、物語としてはとても面白いです。

10 冊のうち、読み終えた本の題名に色を塗ってカウンターで見せてください。
記念品としてブックカバーをプレゼントします！

【　推薦者・図書館専門員０ 自己紹介　】

昨夏の 1 番の思い出は、武蔵五日市駅の近くで 15cm ほどのカエルを見たことです。あれほど大きなのを見つけたのは、子どものとき以来。この夏はどんな出会いがあるのか、少し緊張しています。

『あなたは嫌いかもしれないけど、とってもおもしろい蚊の話』

三條場千寿 ほか 著
山と溪谷社／2019 年
486 サ

蚊が血を吸うのはなぜか。耳障りな羽音の理由は。わたしたちが抱く疑問に 3 人の専門家が答えてくれます。悩ましい存在に感じられる彼らも生態系を保つ大事な役割を担っています。本書をヒントに上手な付き合い方を考えてみましょう。

『5 アンペア生活をやってみた』

斎藤健一郎　著
岩波書店／2014 年
590 サ

東京電力福島第一原子力発電所の事故をきっかけに電気の使用量を見直した著者は、5 アンペア契約をしました。5 アンペアというのは、電子レンジもエアコンも使えない供給量です。一体どのようにして猛暑を乗り切ったのでしょう。

『舟を編む』

三浦しをん 著
光文社／2011 年
913.6 ミ

定年を控えた荒木は、自分の仕事を引き継いでくれる社員を探していました。玄武書房辞書編集部では、新たに『大渡海』という辞書を出版することになったのです。「辞書向きの人材」と推薦されたのは、馬締光也という少しトンチンカンな男でした。

『「自分の木」の下で』

大江健三郎 著
朝日新聞社／2001 年
914.6 オ

学校に行くのはなぜか。今年 3 月に亡くなったノーベル賞作家、大江健三郎もこの問いにぶつかったことがあったようです。知識や知恵を受け継ぐため、他人と関わるため、この 2 つを理由として挙げていますが、皆さんはどう考えますか。

『王への手紙 上・下』

トンケ・ドラフト 著
西村由美 訳
岩波書店／2005 年
949 ト

16 歳のティウリは、騎士として認められるため、最後の試練に耐えていました。仲間と共に礼拝堂で断食をし、一言も話さずに過ごすのです。ところが見知らぬ男の訪問により、沈黙を破ってしまいます。

表紙画像は全て出版社の許可を得て掲載しています。